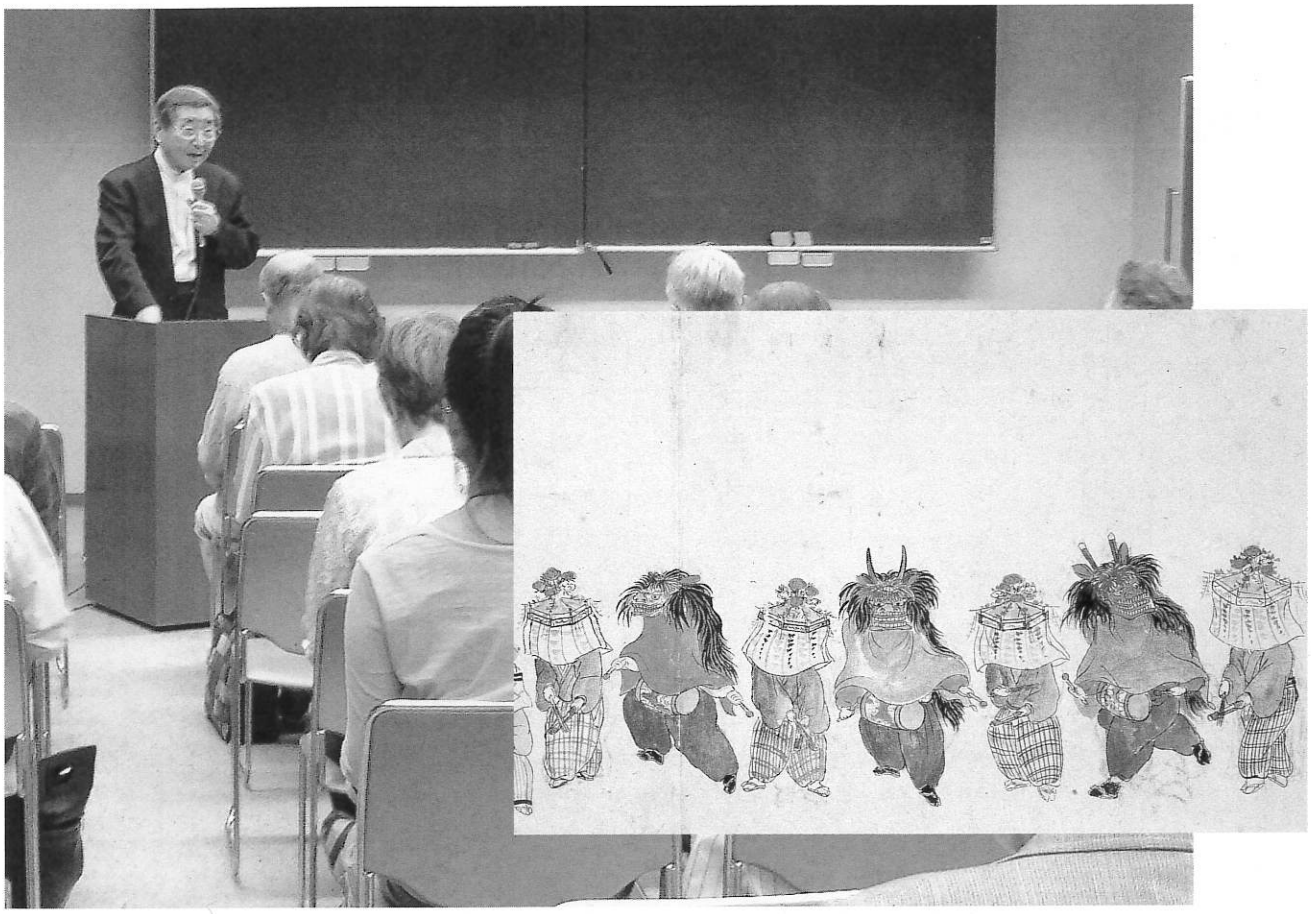
中野区立歴史民俗資料館だより

第52号

しいのき



武蔵野芸能史

名誉館長　三　隅　治　雄

太田道灌が「夕立の　空より広き　武蔵野の原」と詠んだ広い原野が、徳川幕府の成立後、江戸湊は都市化し、周辺は物資供給の農村として新田開発がすすめられました。江古田氷川神社の獅子舞は四神の造り物が連れ添うので有名ですが（写真）、17世紀半ば、新田開発を指導した修験者が若者に伝授したのが始まりと「山﨑家文書」が伝えます。雄二頭・雌一頭が太鼓を打ちつつ踊る形で、多摩地方には70か所ほど分布します。中世から始まり、疫病退散や雨乞い祈祷などに踊って、農民の心の支えでした。

江戸市中は歌舞伎や寄席で年中賑わい、農村は神楽が娯楽でした。奥多摩には、室町期伝来という能の「式三番」や、江戸初期のかぶき踊の姿を伝える鹿島踊、また、説教浄瑠璃や人形芝居がいまも生き、娯楽に恵まれなかった地域ほど、現在は民俗芸能の宝庫です。

文化財よもやま話

「技術」を伝える

「肥後の守」を使えますか。

こんなことをお伺いすると何を当たり前のことをとお思いになるかもしれません。あるいは筆者のようにあまり自信がないと答えてくださる方もいるのでしょうか。「肥後の守」とは何だと思われる方もいらっしゃるかもしれません。

肥後の守とは、小刀の一種で鉛筆を削るときなどに使います。

筆者自身、小学生のときに使ったことがあるのですが、あまり上手くは使えていなかったように思います。最近の子供は肥後の守を使えないという話を聞くことがありますが、使う機会がないというのが実際のところかもしれません。

かつて使われていた道具が姿を消し、それに伴いその道具を使う技術もまた、消えかけていくことは枚挙に暇がありません。

これまで中野区でも区内に残る伝統技術の調査を行っています。(『手仕事なかの―中野の伝統技術点描―』中野区教育委員会　1990年参照）ここで調査の対象となったものは、提灯作りや鋸鍛冶、手描友禅、和菓子作りなどで主として何かを作るという技術でした。

このような製作技術の調査は大切な仕事です。今後も継続していかなければいけません。そして、今後は道具を使うという技術も伝えていく必要があるように思います。当館では様々な生活道具を展示しています。その道具がどのようなものか、どういう風に使うのか。解説だけでは伝え切れていない部分があるかもしれません。

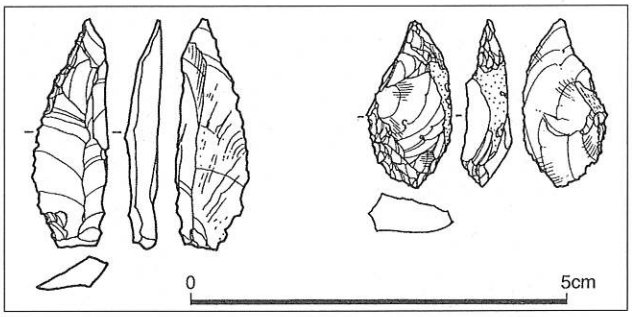
当館では夏休み等に障子張りや洗濯などの体験を行っています。単に資料が展示されているところを見るだけでなく、障子というものがどういう構造なのか、洗濯板がなぜあの形なのか、そしてどのように使うのか、体験を通して様々なことを感じたり、考えたりするきっかけになれば幸いです。

大地に眠る歴史

中野区の遺跡（1）

今回から中野区の遺跡を紹介します。区内には北から妙正寺川・江古田川・桃園川・神田川と四つの河川が流れていますが、主にこれらの河川に面した台地の上に多くの遺跡が今でも眠っています。現在、遺跡があると考えられている場所は約100ケ所が知られていますが、発掘調査が行われて、その内容がわかっているのはわずかです。

その中から年代の古い遺跡から紹介していくことにします。



富士見台遺跡第２文化層（約28,000年前）から出土したナイフ形石器〔旧石器時代を代表する石器で、生活全般の様々な目的に使用された万能石器である。〕

旧石器時代の遺跡　旧石器時代は富士山や箱根山を中心とした火山が盛んに噴火を続けていた時代です。そこからの火山灰は何万年もの間降り注ぎ関東ローム層（赤土）を形成しています。空はいつも噴火により曇り空で直射日光が差し込む日はわずかで、そのため気温は低くなり、今より６～７℃寒かったと考えられています。森は針葉樹が生い茂り、食料資源は動物に頼ることしかない過酷な時代でした。土器はまだ発明されておらず人々はわずかな石器を道具として森の中を移動しながら生活していました。区内では、地表面から約３ｍの深さ、約32,000年前の地層から石器が発見されています。それは都立富士高校の校庭にある**富士見台遺跡**です。この遺跡では、その他に約28,000年前・約20,000年前・約13,000年前の土層から石器が発見され、４面の文化層にわたって人々が住んでいた証が認められたのです。

人々は北側に流れる神田川の水を頼りに、狩猟生活を送っていたことでしょう。

誌上企画展

東京再発見

―江戸名所図会から―

限りなく変貌する時代の中で、歴史的景観は心をなごませてくれます。旅行は常に私たちの心を癒してくれますが、それは現代ばかりでなく江戸時代の人々にも好まれていました。

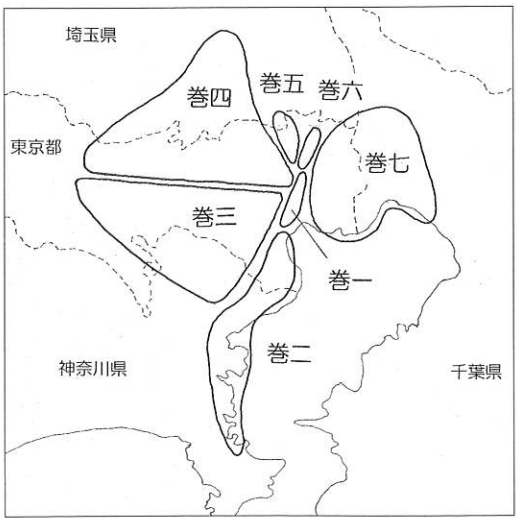
この時代は自由な旅行は制限されていましたが、江戸近郊へのハイキングは盛んに行われていました。現在、東京近郊で知られている名所・旧跡の多くはこの頃からのものが少なくありません。当時、旅行のガイドブックに相当するものが刊行されていましたが、中でも「江戸名所図会」は内容・量・質ともにその代表的なものといえるでしょう。ここでは、そこに描かれた名所のいくつかを紹介してみたいと思います。

江戸名所図会とは

江戸名所図会は、江戸神田雉子町の町名主斎藤幸雄・幸孝・幸成（月岑）の父子三代に渡って編纂された７巻20冊の大著です。

幸雄によって寛政年間（1789～1801）に実地調査が開始され、幸孝によって校訂と追加調査が重ねられ、幸成が祖父・父の遺稿を編集して天保７年（1836）に完成しました。通算して35年間以上かかった苦心の著作です。最大の特長は実地調査から得た詳細な記述もさることながら、同行して膨大なスケッチを描いた長谷川雪旦による挿絵が秀逸ということにもあります。長谷川雪旦（1778～1843）は、はじめ江戸下谷の彫物大工でしたが長谷川等伯に私淑して画家に転じました。東都歳時記と江戸名所図会は雪旦の名を高らしめた代表作です。最近の研究では、彼自身が景色の中に描き込まれていたらしいことがわかってきました。いずれも黒衣の僧形で常に控えめにしている人物が彼自身といわれています。

中野の桃園を題材にした「桃園春興」に描かれた雪旦と思われる人物

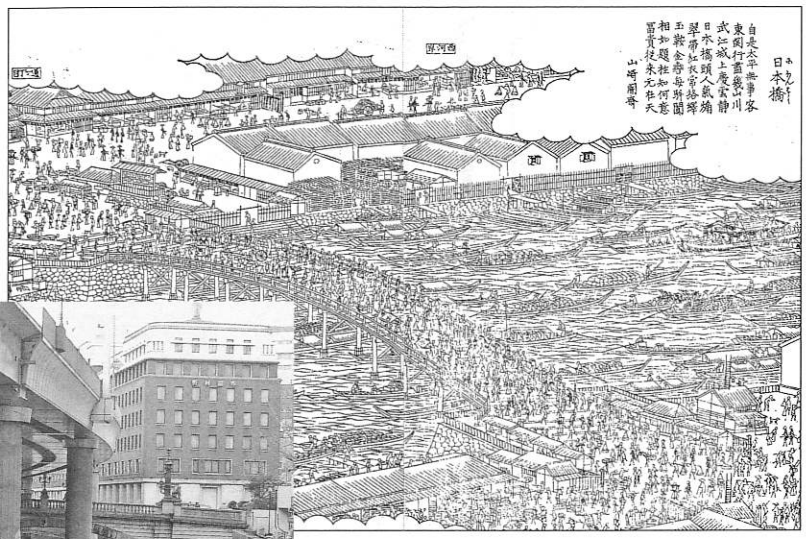


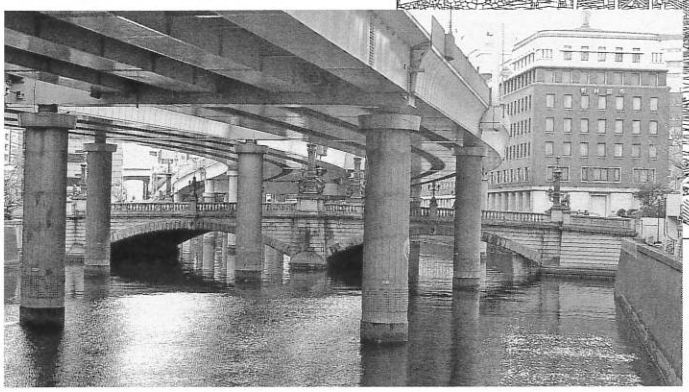
本書の構成は、巻一で麹町から高輪、巻二で品川から六浦（横浜市）まで、巻三では奥沢・多摩川丸子方面、四谷から国分寺・多摩の横山（八王子市）、巻四で市ヶ谷から中野・小金井・落合・練馬・狭山・所沢、浦和・大宮方面、巻五で湯島聖堂から根津・赤羽・川口まで、巻六で浅草から西新井、巻七では州崎・木場から船橋・行徳までと、現在の東京都・埼玉県南部・千葉県東部・川崎市・横浜市にわたる範囲について名所・旧跡を紹介しています。そのうち中野に関連するものとしては淀橋・成願寺・中野長者の墓・中野・中野七塔・宝仙寺・桃園が取り上げられています。

江戸市中の名所を訪ねて

日本橋　日本橋は江戸時代初期慶長８年（1603）に完成した、江戸の中心となる橋で、街道整備の起点として現在でも機能しています。現在の橋は明治44年（1911）に架けられた、長さ49m、幅27mのルネッサンス様式のアーチ型石橋です。日本橋の北東側には江戸時代魚河岸が設けられ、南西側は漆器と旅行道具、荷車の装束などの店が並んでいました。江戸市民の生活・台所の中心でもあったのです。魚河岸は関東大震災のあとに築地に移転しました。

右：日本橋手前の左側が魚河岸、橋向うの右側に高札場、右側一帯の蔵のあるところに、漆器・旅道具の店が並ぶ。

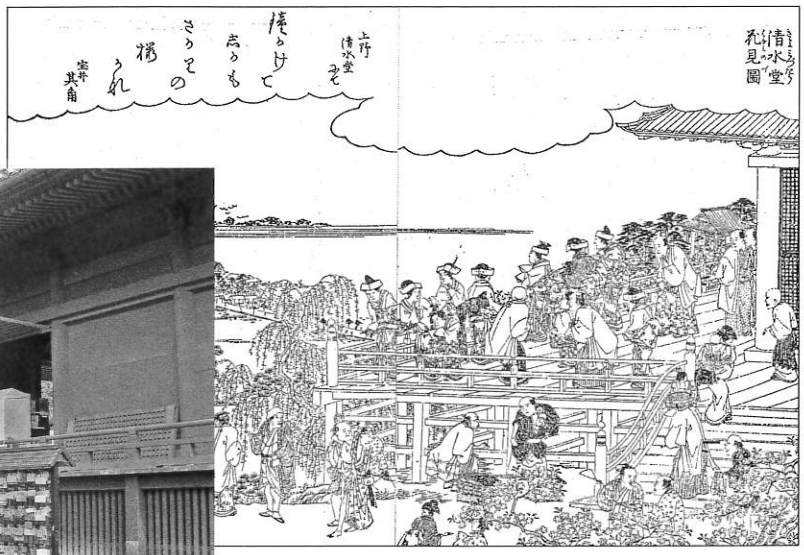


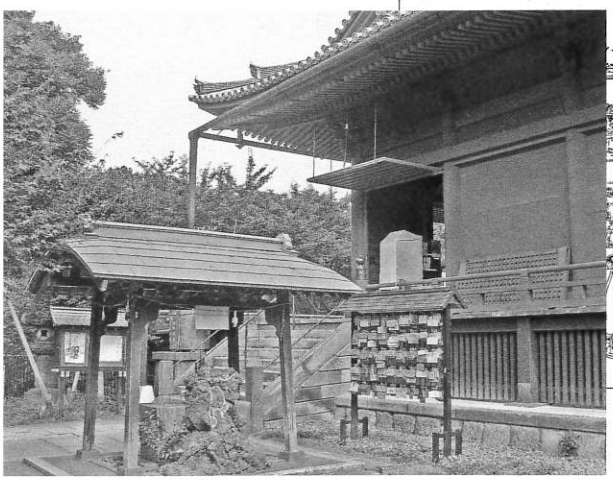


左：現在の日本橋（江戸名所図会右上の蔵のあった位置から撮影したもの）

清水観音堂　現在の上野公園にある清水観音堂（重要文化財）は、寛永寺の堂宇の一つとして京都の清水寺を模して寛永８年（1631）に建てられました。戊辰戦争や太平洋戦争でも焼け残り、かつて隆盛を誇った寛永寺の姿を偲ぶ貴重な文化財です。眼下に不忍池を一望する絶景ポイントでもあり、江戸時代には花見の名所の一つでした。

右：江戸時代はここからの眺望は見事であったが、現在は樹木の繁茂によって不忍池は見えない。





左：現在の清水観音堂

江戸近郊の名所―青梅街道から中野へ

淀橋水車　青梅街道の神田川にかかる淀橋は、中野長者が財宝を隠すため従者とともにこの橋を渡りますが、いつも長者１人で帰ってくるという伝説から「不姿見橋」ともよばれていました。「淀橋」はこの地を訪れた三代将軍徳川家光が名づけたものといわれています。

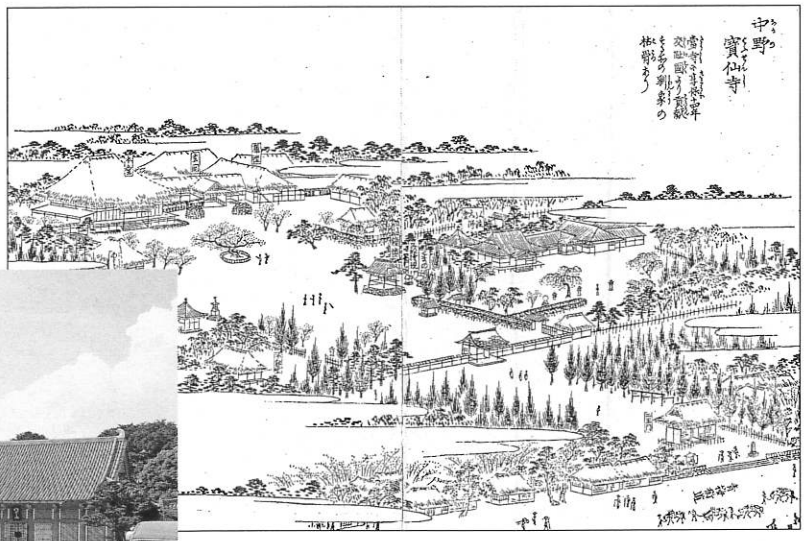
淀橋の北東側にあった水車はこの地域のシンボルでした。幕末には幕府による火薬製造に用いられていましたが嘉永年間（1848～53）に大爆発を起こして姿を消しました。

左：左下に淀橋水車がある、右方向が、成子坂・中野坂上方面である。

右：現在の淀橋（水車のあった方向から撮影したもの）

宝仙寺　青梅街道筋にある地域最大の寺院で、源義家が奥州征伐の帰途に阿佐ヶ谷に建てたのがはじまりで、永享元年（1492）に現在地に移ったといわれています。江戸時代には鷹狩の休息所として徳川歴代将軍が訪れたり、住職は年賀のあいさつに将軍への拝謁を許されるなど格式の高い寺院でした。残念ながら堂宇は戦災で焼失しましたが、室町時代の作である本尊の不動明王は焼失をまぬがれました。

左：現在の宝仙寺。三重塔は平成に建立されたもので江戸時代に立てられた塔は戦前まで現在の区立第10中学校のところにあったが、戦災で焼失した。

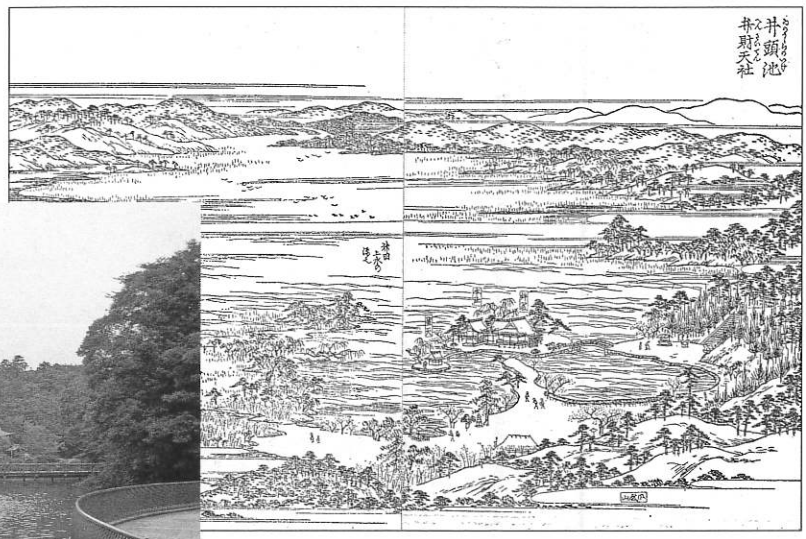


右：江戸時代の宝仙寺の様子

武蔵野名所二景

井の頭弁財天　井の頭弁財天は、神田川（神田上水）の水源地である井の頭池の中島にあり、源頼朝が創建し、新田義貞も戦勝祈願したと伝えられています。「井の頭」の名称は、寛永６年（1629）にこの地を訪れた三代将軍徳川家光の命名によると伝えられています。

右：井の頭弁天と井の頭池を北側から見た構図である。



左：現在の井の頭弁天（都民のいこいの場である）

小金井橋　玉川上水のほとり小平市小川から武蔵野市関前におよぶ約６kmの間の桜並木は見事なもので、その中心は五日市街道と小金井街道が交差する小金井橋でした。この桜は、元文年間（1736～40）にこの地域の開墾を機に大和吉野山と常陸桜川村の桜を植樹したものです。江戸時代多くの人々がここの花見に訪れ、浮世絵などにも描かれるほど有名でした。

現在では、車道からの排気ガスのため年々桜が傷み、植生も変わりつつあります。

右：橋の向こう側の人通りが現在の五日市街道、橋は玉川上水にかかっている。

左：現在の様子（多くの車が行き交い、この地域の交通の要衝となっている。）

古文書つづり

古文書が思わぬ場面で役に立ち

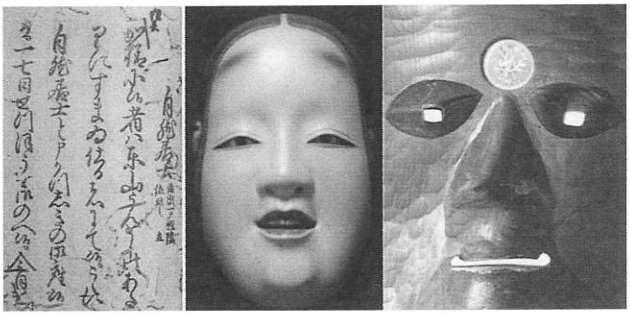
ワールドカップの年でしたので調べてみたのですが、サッカーが競技として確立したのは1863年だそうです。一方日本の蹴球（ケマリとも）は7世紀頃に中国から伝わり平安～鎌倉時代に大流行した芸道の側面をもつ足技の球技でして、この長い伝統を上手に継承できれば日本チームももう少し好成績になるのでは…と妄想したりしました。

同じく日本の伝統芸に、知名度こそ歌舞伎に譲りますがユネスコの世界無形遺産に登録されている「能」があります。こちらは室町時代に将軍を庇護者として形成された芸道です。後に江戸幕府も折々に上演させたりして保護したため、大名を中心に能の教養が求められることになり、結果として能の言葉遣いが武家社会での共通語という地位を得ます。また町人層にも謡（能の台本）が習い事として広まったこともあり、その言葉遣いは江戸時代の各種文章へ受け継がれていきました。

正直なところ古文書を勉強した成果が現在の日常生活で役立つ場面はあまりありません。しかし江戸時代の文章の基礎となった能や、町人文化が育んだ歌舞伎・人形浄瑠璃（文楽）を鑑賞した際に「何を言っているのか」を音声ガイドなしでもだいたい理解できたのは望外の喜びでした。

例えば英語力を磨くのも悪いことではありませんが、せっかく日本にいるのですから、テレビ等で比較的身近な能・歌舞伎・人形浄瑠璃など伝統文化に触れるのもよいでしょう。そしてその時、語学力としての古文書力が役立ちます。

この楽しみを、皆様も味わってみませんか？



謡曲「自然居士」冒頭・能面「小面」・その裏。
裏面写真中央の丸は比較用の１円玉。

中野往来

水野忠徳の墓

上高田1-27-6　宗清寺墓域内

早稲田通り沿いの上高田の寺町に、たつ寺、なが寺と呼ばれる宗清寺があります。ここに幕末の外交上、重要な役割を果たした旗本水野忠徳の墓があります。

墓石は正面に「従五位下源朝臣筑後守水野忠徳墓」、左面に「四世祖実諏訪頼篤次男、挙四男、養一女、長日忠敬嗣家、次日誠次郎夭、次日徳、出嗣堀氏、次日謹吾、幼養千奥住一女夭、享年五十有四、明治元戊辰歳次七月九日逝、長男忠敬謹誌」と刻まれています。

忠徳は、文化12年(1815)旗本諏訪頼篤の次男に生まれ、初めの名は、忠篤、通称は、甲子次郎で、痴雲と号しました。文化５年(1822)旗本水野忠長の養嗣子となりました。嘉永５年(1852)浦賀奉行となり、翌６年長崎奉行に任ぜられました。この年、艦隊を率いたペリーが浦賀に来航し、安政元年(1854)３月に、米国との間に日米和親条約が結ばれました。次いで７月には、英国のスターリングが長崎に入港し、安政元年８月27日、長崎奉行水野忠徳らが、日英和親条約、日英約定を締結しました。同年、勘定奉行に昇進、安政４年８月勘定奉行と長崎奉行を兼務する忠徳らは、オランダのクルチウスと日蘭追加条約を、続いて９月には、ロシアのプーチャーチンと日露追加条約を結びました。安政５年外国奉行に転じ、翌年には神奈川奉行を兼ねますが、その年ロシア士官暗殺事件が起き、責任を問われて、一時西ノ丸留守居に移されます。文久元年(1861)再び外国奉行に就き、小笠原島を開拓のため視察に出向きました。しかし、公武合体策に反対したため、文久２年７月箱館奉行を命じられ、９月には隠居しています。

事業報告

各種事業経過

2006年４月～９月

事業名	内容	期間
企画展	「中野の講」 「ヘンなツクリのみみず文字」	４/18～５/20 ７/21～９/３
所蔵名品展	「浮世絵の競演」 「染付けの美」	５/27～６/30 ９/９～９/30
年中行事展	「端午の節句」 「七夕」	４/18～５/14 ６/24～７/９
歴史講座	「武蔵野芸能史」講師：三隅治雄氏（民族芸能交流財団理事長）	5/24・31・6/7・14
夏休み学習展	「昭和の暮らし」	７/21～８/31
夏休み事業	「紙のおもちゃ作り」７/22　「火おこし」７/26・８/２・23 「姉様人形作り」７/27　「土器づくり」８/４　「勾玉作り」８/５ 「障子張り」８/10　「むかしの工作」８/11 「映像で見る昭和のくらし」８/17　「押絵作り」８/18　「洗濯板で洗濯」８/24 「クイズ歴史講座」８/25　「学習相談室」７/23・30・８/６・13・27	
古文書講座	講師：笠原　綾氏（日本放送協会学園専任講師）	９/16・23・30
公開事業	春季「山崎家茶室書院公開」	４/29～５/７
埋蔵文化財対応	弥生町五丁目11番民有地試掘調査 若宮一丁目13番民有地立会調査 沼袋一丁目30番民有地試掘調査 弥生町六丁目10番民有地試掘調査 野方三丁目14番民有地立会調査 弥生町六丁目10番民有地本調査 白鷺二丁目46番民有地立会調査 新井三丁目31番民有地立会調査 若宮二丁目20番民有地試掘調査（国庫補助金対象事業） 江古田三丁目15番民有地立会調査 江古田二丁目17番民有地立会調査 南台二丁目40番民有地立会調査	４/１ ５/２ ５/10 ５/20 ６/17 ５/30～６/15 ６/28 ７/４ ７/４ ７/４ ７/21 ８/10
その他	昭和なつメロ鑑賞会 博物館実習（７大学７名） 小学校３・４・６学年総合学習見学15校	5/27・7/14・9/15 ８/29～９/10 ４月～９月

寄贈資料一覧

2005年４月～７月　　敬称略受入順

資料名	点数	氏名
文化鍋	1	山田ひろ子
家庭用品購入通帳ほか	一式	伊藤　裕
軍隊手帳・肖像写真	一式	會田幸子
羽子板・日本人形ほか	一式	後藤ハツ子
トースター	1	井口まさ
写真	一式	間瀬一夫
井戸のポンプ	1	荒井澄子

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

入館状況

2006年３月～９月（延べ178日間）　　（人）

一般	団体	学校教育	合計
17,551	84	870	18,505

発行年月日　2006年10月１日

編集・発行　山崎記念 中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022　東京都中野区江古田４―３―４
☎ 03 (3319) 9221　FAX 03 (3319) 9119

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています